

(別紙2)

審査の結果の要旨

氏名 黒田 眞美子

韋應物（いおうぶつ、735 頃-790 頃）は、唐代を代表する自然詩人であり、先行研究も主に彼の自然詩を対象としてきたが、韋は数多くの悼亡詩を詠んでいる。悼亡詩とは妻の死を悼む作であり、西晋の潘岳（247-300）に始まり、唐以前の作品は数篇が伝わるが、安史の乱（755-763）後に突如、韋應物の悼亡詩が質量豊かに出現する。本論文は韋の悼亡詩の誕生の由来と特質および韋の自然詩との関わりを研究するものである。

序章は先行研究、韋應物略伝、唐以前の悼亡詩の概略を記し、特に安史の乱が韋に与えた衝撃と、出仕と閑居の繰り返しであった韋の人生の特異性を考察している。第一章「韋應物の悼亡詩十九首への懐疑」は妻の出自・係累を記述し、韋の妻喪失の悲しみの大きさを述べ、韋の詩作の詳細な読み直しにより、従来他部に組み入れられていた十四篇を新たに悼亡詩として分類した。第二章「韋應物の悼亡詩と潘岳の哀傷作品との関わり」は韋の悼亡詩における今（悲）と昔（喜）との対比の多用と、それが空間移動を伴いノスタルジックな時空を詩境とする点を指摘し、韋の悼亡詩が潘岳の悼亡詩の詩語やモチーフを踏襲する一方、〈妻像〉〈夢〉など新たなモチーフを紡ぎ出している点に基づき韋の悼亡詩の多様性が生み出された動因を明示している。第三章「韋應物の悼亡詩と江淹詩篇との関わり」は、韋の悼亡詩が南北朝時代の齊梁の詩人江淹（444-505）による「悼室人」の道教的神仙世界の「佳人」イメージを継承しつつ、仏教的解脱を求める幽艶な詩境を築いた点などを論じている。第四章「韋應物の悼亡詩と〈古詩十九首〉との関わり」は、『詩経』（紀元前7世紀）から「古詩十九首」（後漢、二世紀半ば）そして潘岳作品を経て韋の悼亡詩に至る詩句と表現における伝播と変容の経緯を論じ、韋が模倣により新たな創造を行った点、およびこの創造が安史の乱期における自らの青春と妻との二つの喪失への哀惜であった点を考察している。第五章「韋應物の自然詩—洛陽時代を中心に—」は、『文心雕龍』（520）などが言及する「景情融合」（見られる〈物〉と見る詩人〈我〉との相即的關係）を韋の自然詩考察の観点とし、六朝時代の陶淵明・謝靈運から盛唐の王維・孟浩然などの歴代の自然詩人および同時代の大暦年間（766-779）の詩人との関わりをも視野に入れて、韋の自然詩における、乱後の荒廃を描く暗黒世界から深い悲哀の直接表現としての〈情〉および時間の推移を背景として〈清〉〈幽〉の詩興を生じる〈景〉へと展開していくようすを論じた。終章「自然詩と〈悼亡詩〉」は、韋の悼亡詩は失われた時空を求める今昔往還の旅であり、時間を凝視することで生まれる蕭條とした「清景」と寂寞たる「幽情」との融合によって生じる衰残の美であり、韋應物詩は悼亡詩によって生まれ、内奥に闇を抱えることで「景情融合」を実現した、という結論を述べている。

本論文は悼亡詩の境界等に関して議論の余地を残すものの、詩語の緻密な分析を通して作品を読解し、韋應物悼亡詩の詩境の文学史的意義を解明した点で顕著な成果をあげており、本審査委員会はその内容が博士(文学)の学位を授与するに十分な水準に達しているとの結論を得た。